

概要

『週刊朝日』(以下、同誌)は創刊から数年間(大正期)で編集方針をダイジェスト記事(索引的編集)から読み物(大衆雑誌)へと変更した。これは創刊時から内在していた編集長の鎌田敬四郎と発行兼編集兼印刷人の赤松静太(作家、土師清二)との構想の違いが編集の変化として現れたためである。社史等では概略しか記述されていないため、本報告では紙面調査をもとに、索引的編集や読み物の特徴を明らかにし、出版学の視座で理解する。

キーワード: 検索装置、読み物、週刊誌、本当にあった事、赤松静太(土師清二)

1. 先行研究と本稿の研究手法

1-1 先行研究

週刊誌研究の基本文献として週刊誌研究会編著『週刊誌』三一書房、1958年がある。戦後の週刊誌ブームを受けマスメディアに成長した週刊誌を分析したものである。『週刊朝日』は扇谷正造編集長時代に100万部を突破したためこの時期について研究対象になることが多く、阪本博志「1950年代『週刊朝日』と大宅壮一」『雑誌メディアの文化史』森話社、2012が、大宅の連載「群像断裁」を分析したように、この時期の名物連載である吉川英治「新平家物語」、徳川夢声「問答有用」の分析をした成果がある。

翻って、本稿で扱う戦前期の先行研究は少ない。『週刊誌』では、戦前期の「週刊朝日」「サンデー毎日」の特徴について、新聞の「日曜附録誌」の延長にあり「時局報道のまとめとしての機能をもった「朝日」と、生活に関する手引の機能をもった「毎日」(65頁)として出発したが、「朝日」は1922(大11)年10月29日号までには、時局報道のまとめとしての機能から生活に関する手引としての機能に席をゆずったとして編集方針の変化を指摘するものの、変化を示す根拠が記されていない。この記述より遡って、創刊期の編集長であった鎌田敬四郎が「昭和四年春まで(週刊朝日生い立ちの記)」『週刊朝日』1939年7月2日号で「創刊いらい二年半あまり(引用者注、1924(大13)年10月ぐらい)の間は、全誌をおよそ三等分して、一部をニュース本位に、一部を学芸および家庭・娯楽の記事に、一部を経済記事にして、読者の希望にしたがって、これを一つ一つ分割して保存しようようにした。」と編集の変化を1924年10月頃としてあげ、また同記事では同誌が当初より一貫して「週報的」な機能があることを述べ、社史などに引用されている。なお同誌の通史として『朝日新聞出版局史』朝日新聞社出版局、1969年、岩川隆『ノンフィクションの技術と思想』PHP研究所、1987年などがある。

2006年に山川恭子が同誌および『サンデー毎日』の総目次をゆまに書房から刊行し、博士論文「戦前期週刊誌メディアの受容形態－その「大衆性」と「戦争加担」との関係に注目して」筑波大学甲第5875号、2011年を含むいくつかの論考をまとめて、研究基盤の整

備において大きな成果を挙げた。山川（2011）は大部なので、本稿に関わる点を挙げるならば、目次の記事数をもとにした数量分析によると、創刊期の変化について、『週刊朝日』は政治や社会問題、『サンデー毎日』は実用記事にやや比重をおく傾向があり、記事の数量的な変化を次のようにまとめている（26頁）。

- ・文芸記事－創刊～1924（大13）年急増、以後も他の分野よりも多い。
- ・実用記事－1923（大12）年～1924年増加、1925（大14）年以降創刊当初と同数。
- ・社会・事件記事、政治・経済記事－創刊～1924年にかけて減る。

さらに、山川は2誌を貫く視点として『週刊誌』で取り上げられていたヒューマンインタレスト（人間的興味）を挙げた。このヒューマンインタレストは、大正期の新聞の社会面に出てきた記事スタイルである。社会部は、文芸部から分かれた組織であり作家志望の若者の集まりであり、文芸思潮のゆりかごであった（松尾理也『大阪時事新報の研究』創元社、2021年、109-111頁）。二誌が新聞社の出版物であり、編集者・記者に学芸部・社会部の記者がいたことを考えると、創刊期から内在していた視点であろう。

さらに、山川は、満州事変と国際連盟脱退の関連記事を分析し、同誌の特徴として「新聞の内容に追従する形式の「ダイジェスト版」としての役割に、評論家や専門家による評論や解説記事を合わせることで、読者に意思決定の指針を示す役割を果たしていた」（84頁）と重要な視点を提示している。

1-2.研究方法

先行研究で、同誌の大正期（1922～1926）の編集上の分岐点として1922年10月と1924年10月の2つの指摘があった。山川（2011）の数量分析は、掲載記事数をカウントしているため、各記事のボリューム（字数）や内容についてまで踏み込んでいない。そこで、本稿では次のような方法で調査する。2節で社史、各創刊記念号の編集者のコメントの収集、誌面調査、『朝日新聞』掲載の広告の収集により得た情報を年表で事項整理する。索引的編集を考えるため、アン・ブレア（歴史学）の“検索装置”という概念を援用して、どのような装置（例：索引、連載のロゴ）があったかを探る。そして索引的編集の重要な装置である“索引”大項目の“週間”の頁数の変化を探った。さらに、読者の受容を探るため1927（昭2）年2月～3月にかけて掲載された読者評「週刊朝日と私」84件を分析した。3節では読者の評価の高かった非文学系の読物である連載「本当にあった事」（実話）、「そこばくの言」（評論）の構造を山川恭子（2011）、尹蕪汐（2013）「『週刊朝日』と清張ミステリー—小説「失踪」の語りから考える—」『日本近代文学』88を用いて分析する。

2.調査結果

2.1 創刊時の二つの編集方針

- ・鎌田敬四郎（編集長・出版局局长）

1.2で引用した鎌田（1939）のコメント。

- ・赤松静太（発行兼編集兼印刷人）

硬軟まぜた週間ダイジェスト／大衆・娯楽・読物雑誌／朝日の社風

参考)『朝日新聞出版局史』48頁、『ノンフィクションの技術と思想』126頁、土師清二「創刊時代(週刊朝日生い立ちの記)」『週刊朝日』1939年7月2日号

2-1. 事項整理

表 1. 『週刊朝日』大正年間(1922-1926)の編集の歴史

| 西暦 | 和暦 | 月日 | 事項 |
|------|------|-----|---|
| 1922 | 大正11 | 2月 | 『旬刊朝日』創刊、1巻1号(2月25日)、大阪朝日新聞が編集の主体 |
| | | 3月 | 3月15日号(1巻3号)から表紙オフセット印刷 『旬刊朝日』を小学校の副読本として配布(「旬刊朝日と諸学校」大11年3月25日号) |
| | | 4月 | 『週刊朝日』創刊(『旬刊朝日』改題、4月2日号(1巻5号)) ・各部(週間/インサイド/経済週報)分離式をやめ、頁付けを巻全体で通しページとする。 ・半年ごとに巻数を改めて、毎号詳細な索引をつけることを宣言。 ・巻頭に著名人の論説(記名)を掲載する。 |
| | | 5月 | 北尾新聞舗が『週刊朝日』保存用綴を販売する。(『週刊朝日』5月28日号(1巻13号)) ※『週刊朝日』は折のみで綴がなかったため |
| | | 7月 | 1巻総索引作成。(『週刊朝日』7月2日号(2巻1号)) |
| | | 10月 | 大阪朝日新聞の大型企画と連携 (10月8日号(2巻6号)近松記念号、10月22日関西婦人連合大会特集) |
| | | 10月 | 10月29日号(2巻19号)、巻頭が無記名の論説になる(→「そこばくの言」の原型か?) |
| | | 11月 | インサイドがなくなり、週間と経済週報が残る |
| 1923 | 大正12 | 1月 | 『アサヒグラフ』創刊(杉村楚人冠編集) |
| | | 4月 | 赤松静太が土師清二名義で「水野十郎左衛門」連載(4月1日号) <u>赤松の同誌の執筆歴</u> 大正11年9月17日号～善知鳥名義で劇評 同年12月10日号～12月24日号 赤松静太名義「こわれた時計」(脚本)と関連記事 |
| | | 5月 | 鎌田敬四郎が関西朝日会で編集方針を説明、その中で「『週刊朝日』は今日の時代に必要なる知識と娯楽とを最も消化しやすい形にして読者に提供する」と述べる。 |
| | | 10月 | 『コードモアサヒ』創刊(『週刊朝日』編集者が兼務、赤松静太が中心) 『週刊朝日』売り切れを防ぐため、毎回の印刷部数を増(典拠 4巻18号広告 大朝10月18日) |
| 1924 | 大正13 | 1月 | 価格値上げ(1部10銭⇒12銭、増ページ28頁⇒36頁) 時事解説、家庭生活記事・娯楽記事の増加、コードモページの拡張 広告も巻号表示から月日号表示へ変化する。 |
| | | 9月 | 常司鈴太郎「本当にあったこと」連載開始(9月28日号より) |
| | | 10月 | 経済週報欄の終了を伝える告知(10月26日号) 「本号よりは日常生活に緊密の関係ある経済記事を頁を限らず掲載する」 <u>→創刊時の編集方式の終了</u> この月発売の『東京朝日新聞縮刷版』大13年7月号より重要問題解説、内外時事日誌がつく。 |
| 1925 | 大正14 | 4月 | ラジオ企画種々開始 ⇒イベント ⇒演劇とタイアップ(7月12日、脚本募集、翌年1月4日 東京放送局で宝塚が上演) ⇒自社出版 「地方色」(投稿)掲載開始 |
| | | 10月 | 三上於菟吉「敵討ち日月草紙」(画:小田富弥)連載開始=『サンデー毎日』同様、巻頭(3頁から)に挿絵入りの人気の大衆小説家の連載を開始する。 ※同誌では巻頭にも掲載する形で岡本一平の漫画小説「富士は三角」(大13年11月16日号～)、 米田華紅「楊貴妃」(大14年4月5日号～)、額田六福「饜饉の恋」(大14年5月10日号～)、 正宗白鳥「人を殺したが」(大14年6月21日号～)などの連載があった。 ※『サンデー毎日』は1924(大正13)年5月から巻頭連載開始:白井喬二「新選組」(画:金森親陽) |
| 1926 | 大正15 | 1月 | 社告にて 新春号から表紙グラビア2色刷り+毎号ワイヤスイッチ製本 (断ち切りのままで重ね折りで綴じられていなかった) |
| | | 6月 | 赤松静太が土師清二として作家活動に専念するため退職する。 |
| 1927 | 昭和2 | 2月 | 創刊5周年 「週刊朝日と私」 ※『旬刊朝日』創刊を起点としている。 |

2.3 索引

・本稿の索引的編集の定義＝号単位においては本紙（朝日新聞）のダイジェスト記事を分類別に配置し、読後は巻単位の記事索引と綴による保存機能をつけ長期利用させる編集。

表 2. 朝日新聞社定期行物の索引の有無（大正末）

| 雑誌名 | 大阪朝日新聞社 | | | | | 東京朝日新聞社 | | |
|-------|---------|--------|-------------------|--------|----|---------------|-------|--------|
| | 週刊朝日 | コドモアサヒ | アサヒスポーツ | 朝日年鑑 | 婦人 | アサヒグラフ | 映画と演芸 | アサヒカメラ |
| 索引の有無 | 総索引 | 調査未着手 | 2-5巻 重要記事索引 | 五十音順索引 | なし | なし 『聞蔵』Ⅱ参照 | 調査未着手 | 調査未着手 |
| 他の編集 | | | 写真説明文に 日本・英語表記 | | | 写真主体 | | |

杉村楚人冠がロンドン視察を踏まえ、1919（大8）年8月に索引と長期保存に耐えうる『東京朝日新聞縮刷版』を刊行した（『朝日新聞出版局史』P28）

・出版物の検索装置を考えるための視点（アン・ブレア『情報爆発』中央公論新社、2018年、p166に示された近代初期のレファレンス書にみられる検索装置）

典拠一覧／見出し一覧／アルファベット順の見出し索引／アルファベット順の固有名詞索引／アルファベット順の一般的索引／樹形図／
レイアウトまたはページ構成：見出し、飾り文字、記号活字、余白

表 3. 索引と週間の変化

| 索引名 | 特徴 | 分類項目数 | 記事種数 | 備考 |
|-------------------------|---|-------|------|---|
| 第一巻索引 1922(大11)年2-6月 | 3階層 週間/インサイド/経済の部-五十音-分類/記事混在 ※分類付与されない記事あり | 110以上 | 690 | 東朝縮刷版の分類との重なり率 週間32/43 (72%) インサイド11/29 (40%) |
| 第五巻索引 1924(大13)年1-6月 | 3階層 一般記事と経済の部-五十音順(分類)-記事 ※一般記事はすべて分類が付されている | 68 | 1002 | |
| 第九巻索引 1926(大15)年1-6月 | 2回層 五十音順(分類)-記事 ※すべての記事に何らかの分類が付されている | 49 | 757 | |

| 週間のページ数と全体に占める割合 (毎年4月と10月の任意の号の定点観測、1925は未調査) | | |
|---|--------|----------------------------|
| 1922(大11) 2.25 | 12/36 | 3分の1 巻頭 1巻1号旬刊の割合 |
| 1922.4-1923.4 | 6/28 | 20% 前のほう |
| 1923.10. | 2.5/28 | 9% |
| 1924.4- | 2.5/36 | 7% 全体は増頁も週間は同じ、1924.10-巻末に |
| 1926.4- | 1~2/36 | 3~6% |

表 4. 「週刊朝日」で細分化している項目（1928年を比較対象）

| 週刊朝日索引 (1928年7月-12月) | 大阪朝日の対応項目 (1928年7月) | 東京朝日の対応項目 (1928年7月) |
|-------------------------|------------------------|------------------------|
| 演芸 | 映画・演芸 | 演芸映画 |
| 映画 | | |
| 音楽舞踊 | 音楽 | 音楽舞踊 |
| 囲碁将棋 | 囲碁将棋 | - |
| 釣り | - | - |

| 週刊朝日索引 (1928年7月-12月) | 大阪朝日の対応項目 (1928年7月) | 東京朝日の対応項目 (1928年7月) |
|-------------------------|------------------------|------------------------|
| 戯曲脚本 | 文芸読物-作品名 | 文芸美術-作品名 |
| 講談 | | |
| 小説 | | |
| 大衆読みもの | | |
| 美術工芸 | | |
| 文芸(詩、短歌、俳句、川柳) | 文芸読物-朝日歌壇、朝日俳壇 | |
| 漫画漫文 | - | - |
| 落語 | - | - |
| 少年少女の読みもの | - | - |
| 随筆 | - | - |
| 説話 | - | - |

表 5. 週刊朝日では集約化している項目

| 週刊朝日索引 (1928年7月-12月) | 大阪朝日の対応項目 (1928年7月) | 東京朝日の対応項目 (1928年7月) |
|-------------------------|------------------------|------------------------|
| 時事解説 | | |
| 米国大統領選挙始まる | アメリカ、社説 | アメリカ合衆国 |
| 金解禁通俗講話 | 金融、社説 | 経済、社説 |
| 不戦条約とは何んなものか | 国際外交、社説 | 社説、不戦条約問題 |
| オブレゴンの死 | メキシコ | メキシコ |
| 麻布連隊のモダン兵舎 | - | - |

2-4. 読者評(「週刊朝日と私」より)

・回答者(回答数 84)の居住地域

近畿 26(うち大阪府 11)、九州 13、外地 8、中部 7、北陸 7、関東 7(うち東京都 5)、四国 7、中国 6、東北 2、北海道 1

①好きな記事 ②長所 ③読む場所 ④保存方法

| | | | | | | | |
|---------|----|--------|----|----------|----|-----------|---|
| 文芸作品 | 12 | 月刊誌より得 | 12 | 家(家族)で読む | 22 | 製本して保存する | 5 |
| 政治・政界記事 | 11 | うち廉価 | 6 | 列車で読む | 3 | うち4が家族で読む | |
| 本当にあった事 | 9 | 知識を得る | 6 | 職場で読む | 2 | 切り抜いて保存する | 1 |
| 育児相談 | 8 | 新聞の補足 | 6 | | | | |
| 地方色 | 7 | 新聞の代わり | 3 | | | | |
| 童話 | 3 | | | | | | |
| そこばくの言 | 3 | | | | | | |

2-5. 読物の書誌事項

① 本当にあった事

記事名：本当にあった事 作者：常司鈴太郎〔職能的な書き手〕

編集者：赤松静太〔決定権をもつ編集者〕・白石凡〔職能的な編集者〕がリライト

掲載期間：1924(大13)年9月28日号～1929(昭4)年12月22日号(途中休載有)

挿画なし（→文学の編集スタイル）、1回あたり原稿用紙（400字）約30枚

↳他メディア連携

書籍：常司鈴木太郎『本当にあった事』朝日新聞社、1926年

鈴木常吉『本当にあった事：謎の小笛事件その他．続篇』朝日新聞社、1929年

舞台：井上正夫一座 1927年5月（『週刊朝日』1927年5月8日号）

↳改題「本当にあった話」

1930（昭5）年から一般公募に切り替え、1931（昭6）1月から実話全般の企画に変化。

↳改題「悪の華」

鈴木も含めた複数の執筆者によるリレー連載

②そこばくの言（無署名）

掲載期間：1923（大12）年5月～1930（昭5）8月24日号（管見の限り）

イラストなし、ロゴあり、1回900字程度

6.考察とまとめ

①週間の割合と索引の比較結果を踏まえると、新聞のダイジェスト→新聞で扱わない分野を補完する出版物に変化した。索引は洗練され記事/項目混在→項目になった。保存機能にワイヤスイッチ製本が追加、号単位の存在感が増した。編集モデルの変化は以下のとおり。

創刊時

| | | | |
|--------------|-------|------|------|
| ダイジェスト | 読物 | 検索装置 | 保存機能 |
| 旬間／週間 / 経済週報 | インサイド | 索引 | 綴 |

1926（大15）年

| | | | |
|-----------------|---|--------|------|
| 読物（朝日の社風に沿ったもの） | ※ | 検索装置 | 保存機能 |
| 文芸、本当にあった事 | ※ | 索引（項目） | 綴、製本 |

※ダイジェスト・そこばくの言 創刊時と比較して10%程度の掲載量

②「そこばくの言」は“週間”に掲載され、巻頭言や社説に近い性格の読物である。前半部にトピックの概要（ダイジェスト）→参考となる外国の事例や考え方や格言→考えかたの提示の構成となっており、構成に索引的編集の性格が見える。

③「本当にあった事」は、関西を舞台にした詐欺・殺人事件を詳細な情報と調書の引用で伝える記事だが、読者に日常のリアリティを感じさせる書き方をする。読者は「明快な文章で解決を与えてくれ、また種々な教訓を授けられるものとして愛読」（『週刊朝日と私 その1』大阪市住吉区仮番号10）、「考えさせられる」（『週刊朝日と私 その1』佐賀県鏡村仮番号38）などの読後感を得る。読者は、自分もいつ被害者または加害者になるかもしれないという闇を知る。戦後の同誌掲載の松本清張のミステリーにも通じる構成である。

※本調査は、JPS 科研費（20K00361／研究代表者：副田賢二）の助成を受けた研究成果の一部である。